

■ 第15回 IP-Talkの会

3月1日、汐留の松下電工ホールをお借りして、「第15回IP-Talkの会」が行われた。この会では毎回、時代や社会の潮流となっている事象についての第一人者をお招きし、その背景となっている事柄についてお話し頂いている。今回はリノベーションに特化したデザイン事務所、株式会社ブルースタジオ取締役の大島芳彦氏と石井健氏に「多様化するライフスタイルと「理想」の住まい」というタイトルで講演をお願いした。ブルースタジオはリノベーション物件を求める人達のメーリングリストを作製しており、そのメンバーは東京圏の30代を中心に1万2千人に及んでいるという。その母数を元に「住」に対する意識調査を行い、その詳細な分析から講演は始まった。そこから受けた印象は、「理想」の不在、そして住むという行為への「積極的な軽さ」である。そしてそれは、その様な状況に対してデザイナーが何をすべきか、という問いも包含する。「物件から物語へ」・・・講演会での最後のスライドの内容である。一つの物件を、デザイナーは「作品」、不動産業者は「



商品」、金融機関は「担保」、住み手は「住まい・資産」・・・と様々に呼び変える。そのようなこれまでの図式に対して、その物件に各々の立場にとって価値を高めあう事の可能（作品として成立し、流通性が良く、資産価値が上がり、住み手も満足）かつ皆の共有出来る「物語」の設定を、デザイナーが行わなければならない。一般に広く「リノベーションブーム」が起きている今、プロジェクトのプロデューサー、コンダクターとしての役割こそがこれからのデザイナーに求められるべき職能である、というブルースタジオの主張は非常に示唆に富んだものである。

前半の講演会に引き続き後半は24階のラウンジに場所を移して、JIPAT副会長の帛屋氏をパネリストに迎えてお酒を呑みながらのトークと、来場者間の懇親を計る目的での交流会を行った。今回の来場者数は81名、内ビジターが27名と、会員増強を視野に入れた活動の端緒としては、まずまずの集客であった。会員交流と会員増強という二つの目的を同時に満たす為にいかに活動するか、今後の課題である。

黒川哲志（一般会員）



■ 途中下車 カンディハウスtosai【トーザイ】デビュー

ところで、ケルン国際家具見本市をご存知ですか？ケルンはドイツ西部の都市で世界遺産の大聖堂（ドーム）がある都市といったほうが分かりやすいかもしれません。そこに「ケルンメッセ」という国際的な見本市を行う施設があります。今年は1月15日~1月21日の1週間、国際家具見本市が行われました。まずメッセ会場の大きさにびっくり。293,000平方（東京ドーム約6個分）の広さに1400社のブースがあるのです。11のホールに分かれていて、カンディハウスのブースは「ホール11~3」にあるのですが、そこへ行くのにも入口から20分近く歩きます。今年で3回目の「imm cologne 2007-ケルン国際家具見本市(1/15~21)」への出展。2002年のミラノへの初出展から、ヨーロッパでの展示会も5回目となりました。その間、カンディハウスはヨーロッパ市場への進出を果たし（2005年に、現地法人カンディハウスヨーロッパを設立）、ドイツ・ケルン市外にショールームをオープンしました。昨年は、デザインと機能が評価され、ミラノ展でも注目を浴びた「バリンジャーテーブル」を中心に来場者の方々にアピールし、この1年でドイツを中心とした20数件のヨーロッパの家具専門店で展示販売頂いております。今回は、カンディハウスが日・米・欧での展開を目指す新シリーズ tosai【トーザイ】を、ケルンメッセという国際的な舞台上で発表いたしました。tosaiは、日本の伝統的な木工芸や住文化に学びパウハウ

スの影響を受けた世界的にも著名なデザイナー、ペーターマリー氏とのコラボレーションにより生まれました。



プロダクトデザインに加え、展示ブースのデザインやカタログのグラフィックデザインも監修していただいたことも、今回の出展の成功に繋がりました。新しい家具コレクションの為に、国産家具メーカーのカンディハウスがドイツのデザイナーと手を組んだことには理由があります。カンディハウスは約40年に及ぶそのデザインの歴史の中で、欧米と日本の文化を融合させることにより、オリジナリティに富んだ新しいアイデアを生み出してきました。

ていねいな手仕事と先進技術により高級素材であるウォールナットやナラの質感を最大限に引き出し、同時にステンレスやアルミ素材と組み合わせることで生成りの美しさとシャープさとを両立させました。国内では、6月の旭川の木工祭での発表に先立ち、5/17~20に東京ショールームにてご覧いただける予定です。

■ 「ミラノサローネ・2007」に出展します

フジエテキスタイルはミラノサローネはミラノ・デザインウィークとしてミラノの町中の様々な会場で4月18日～23日の間繰り広げられ、デザインを愛する人たちがこの期間中50万人以上集まり世界最大規模のデザインイベントとなります。

2005年のミラノデザインウィークではトヨタが世界に向けてレクサスを発表したことでデザインを大切にする日本の企業群が参加する動きが目立つようになりました。フジエテキスタイルはこのイベントに公式出展する「東京デザインプレミオ」という国家プロジェクトに参加することとなりました。

東京デザイナーウィークの主催団体であるNPO法人デザインアソシエーションが主催し、ジェトロ（日本貿易振興機構）の共催、経済産業省が後援して実施されるイベントです。

インテリアファブリックとしてはフジエテキスタイル一社の参加となります。

「東京デザインプレミオ」はインテリア・プロダクト・グラフィック・ファッション・フード・ムービーWEB・ビューティーなどの東京をデザインでリードする50組の企業と東京デザインを表現する多彩なデザイナー達が参加しています。世界最高のデザインシーンで日本の現代デザインをプレゼンテーションする展示会と、毎晩開く東京パーティというデザイン交流イベントが予定されています。ミラノデザイン・ウィークでは郊外の国際展示場「フィエラ」会場とミラノ市内で行われるデザインイベント「フォーリ・サローネ」に分かれてこの期間中、様々なイベントが繰り広げられます。

最近では郊外の「フィエラ」展示場で行われる家具インテリア展よりも、ミラノ市内で行われるデザイン全般の非常にグレードの高いイベントである「フォーリ・サローネ」に人気が集まっています。

「東京デザインプレミオ」は、この「フォーリ・サローネ」でも最も注目のミラノのデザイン界で人気の高いトルトーナ地区にあるスーパースタジオという建物1000㎡を借切って、日本のデザインを世界に発表する一大イベントとして行われます。1000㎡の会場全体には直径1m×長さ2.5mの大きな円筒状のフジエの生地で作った照明の笠が天井から吊られて飾られることになりました。栗辻博デザインのフジエテキスタイルのハートアートシリーズのナミ(HA3305GY.1331GY)で決定しました。20本の大きなフジエの生地の円柱が、天井から吊られその中に、フジエの生地をディスプレイしたブースがあります。フジエブースでは、液晶モニターでフジエのデザインも流すことにより会場全体とのつながりを感じさせる展示となります。主催者であるNPO法人デザインアソシエーションのウェブサイトイメージパスと展示会の詳細が掲載されています。<http://www.c-channel.co.jp/jp/exhibition/milan.php> 会場では、盛大なパーティが計画されており開催前日の4月17日の夜には内外の約60社のマスコミ、雑誌、新聞社へのプレス発表パーティが会場で予定されています。テレビ東京のデザインチャンネルが逐一収録して放映します。

フジエテキスタイル 山本

■ 未公開家具

「江戸の商家で芝山のお札を貼らないタナはない」火事・泥棒除けの”におうさん”は江戸時代の庶民には絶大な人気があったそうで、この芝山仁王尊は奈良時代末期に創建され1200年余の古刹が有る町が今回の主役です。

芝山細工とは、安永年間（1775年頃）に今の成田空港の近くの芝山村に大野木専蔵（仙蔵とも）が芝山象眼を始めたのが事の始まりで、その後芝山専蔵と改名し江戸に出て芝山象眼を広めました。漆や木に象牙や貝、珊瑚その他の素材を象嵌し蒔絵を施したものである。そして1859年横浜開港によって大きな転換期を迎えるのであります。新しく開かれた港町を行き交う外国貿易商たちは、芝山象眼の繊細美あふれるこの細工に、見惚れ評価して、競って自国に持ち帰った。そして明治6（1873）年のウィーン万国博覧会で人気を不動のものとし、欧米に向けて盛んに輸出された。本資料は、現存する芝山細工の家具の中でも、特に大型で、高品質なもの一つ

で、周辺部の装飾には七宝技法を併用している。中央の右扉の象牙部分に「易之」の刻銘がある。そして横浜から独自に芝山漆器が生まれ、長崎では、貝の下に彩色を施した華やかな雰囲気色の伏彩色螺鈿漆器が制作された。

西洋人の注文で制作された漆器で、バイオリン2挺を納める形式の箱。長崎青貝細工には「小琴箱の図とともに、「又二丁入も有之候」の注記がある。バイオリン・ケースは、人気商品の一つであったようだ。



花鳥人物蒔絵象嵌飾棚（幅6尺 高9尺）
（国立歴史民俗博物館蔵）

■ 町名由来板 永田町1丁目



今冬（2006年12月～2007年2月）の日本の平均気温は、統計を開始した1899年以降、高温第1位、北日本、東日本、西日本日本海側の降雪量は地域平均の統計のある1961/62年以降で最も少なかった。（気象庁発表）

今月始め長野市に仕事で出かけました。ぽかぽか陽気で善光寺に向かう、だらだら坂で汗をかきました。土産物屋さんで土地のお百姓さんが田んぼの畔焼きをするのに例年だと枯れ草に火をかけると自然に畔全体が燃えるのだが、今年は新芽が出てきてバーナーで焼かないとダメだと話していました。雪がないと雪解け水が無くなり、生態系にかなりの異常が発生するそうで、例えば琵琶湖の湖水は夏に

は死の海になるとか、さて、季節外れの大雪のあった3月3日、現在の議事堂前和式庭園あたりから、カゴに乗って登城する行列が桜田門に掛かろうとした、そこに突然18名の刺客が襲いかかった。時は万延元年（1860年、明治維新の8年前のこと。）水戸と薩摩の脱藩浪士が襲撃、井伊家の警護は30名もいたが、折悪しく雪の降る日で、刀を柄袋にしまってあったがため応戦が遅れ、むざむざ藩主を殺されてしまう結果となった。これが桜田門外の変です。孝明天皇の勅許を得ずに日米修好通商条約に調印し、この通商条約に反対した者たちを死刑にしたり、あるものはとらえられ入牢の刑に。これを安政の大獄と呼ぶ。そして十四代将軍に水戸家出身の一橋慶喜ではなく、紀州の家茂を推したことが引きがねとなり、薩摩の尊王攘夷派と水戸家の憎悪を一心に集めてしまった。この人の名は大老井伊直弼47才であった。此の事件で幕府の威信は著しく失墜したのは、云々までもなく幕末が怒濤のごとく押し寄せ始めた。

■ 知って知らない道具達

手考会

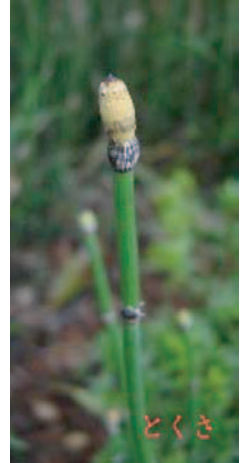
昨年10月東日本橋で手考会（木工好きの方々が集まってつくられた会）の展示会を拝見することができました。プロを目指す若者から少し余裕のできたミドルや、木工に全く関係ないIT企業の部長さんや趣味として木工や手工具を極めたい方々が、プロと同じ手道具でプロに学んでいて、指物的技法のすべてにこだわっていますそれが手考会です（山川行夫氏談）日本の伝統的な手法を使ってモノ作りや手工具の仕込み、自作などを研究する会でそうで、

墨田区立川にある井上刃物店に出入りする木工好きが集まって出来た会で、東京都の建具指導員の友国三郎氏の工房で指導を受けながら活動している。プロの人から、注文家具の工房で働いている若手職人や、中にはオーストラリアからの人もいて、日本のこの素晴らしい技術を自国に広めたいと学んだ事をオーストラリアの雑誌に掲載しているそうで、入会するとまず"尺"で箱を考え、留め構造でモノをつくることから始めます。最初につくるのが筆入れで、あまりの精巧さに思



わず買ってしまいました。3ヶ月経つと一輪挿しを課題で制作、隠しアラシを入れながら、木の表・裏を使い分ける術を学びます。つまり一輪差しは、花が主役なので空目は裏でなければいけないと云う風に学びます。

一年過ぎると道具づくりに挑戦、木の台をつくり、ゲンノウをつくるそうで江戸ゲンノウは両方がまっすぐに切り落としてあり、片方は凸になっていて片方は水平だそうで、平面の4分の3ぐらいに釘を打ち込み、この後で片面（凸面）で打つと、打痕が残らずきれいに打ち込めます。関東地方では東型（小判型）が、関西地方では地型（真丸形）が用いられ、また、上方は片方が尖っている片口玄翁（カシメ、釘メに使われる）がつかわれています。（井上社長）その柄の作り方は自分の腕に合わないといけないそうで振り落とした時、釘に平行にそして手から抜け飛ばないようにするのが大切だそうです。次はカンナの制作で、つくるモノにより、カンナの木部の長さや刃の勾配が違うので品物によりその都度つくるそうです。そして仕上げに"紙やすり"のかわりに昔から使われている、木賊（とくさ）はあらゆる用、仕上げ用にはムクの葉をつかいます。写真は山川氏のおせあり（おとりあり）の平机を紹介します。これは天板の反り止めのために入れるそうです。



■ 入退会者

入会者 福島 敦（IP試験セミナー受講者）、
石橋 美幸（HPから）

退会者 正会員：鈴木 慶一

■ 編集後記

雪が降らない事を調べていたら、どうやら地球温暖化は今年がキーイヤーになるような学者の発言が聞こえてきた。京都議定書にアメリカがサインしなかったのはブッシュさんが企業に向けてのサービスで、サインをすると4000億ドルが必要とのこと、ニューヨークは真冬で22度、"怖いですね"ではすまされなくなりそうです。